

発表題目：キルギス共和国における言語政策の研究—これまでの成果と今後の課題—

## 発表概要

### 1. 自身の研究領域について

私が基盤を置く主な研究領域は、「中央アジア地域研究」と「社会言語学（言語政策研究）」である。

中央アジア地域研究は日本において今まさに研究が進みつつある分野で、歴史、国際関係、環境問題等様々な角度から研究が行われている。しかし、言語の問題を正面から扱う研究はまだ少ない状況にある。

言語政策研究では、これまで世界の様々な地域を対象とし、国民形成、近代化、独立運動等における言語の役割に関する研究が行われてきた。しかし、中央アジアの言語政策に関する研究は、特に日本においてはソ連崩壊後に始まったばかりであり、この地域を対象とした言語政策の研究事例を提示する必要性がある。

### 2. 卒業論文の成果と課題

2007年度提出の卒業論文「キルギス共和国におけるキルギス語とロシア語の言語選択—社会と個人の視点から—」では、今後の研究の土台を形成するために、言語政策に係る論点を広く記述、整理することを目的とした。この研究を通し、以下の2点が明らかになった。

- ①独立以降、公の場で用いる言語をロシア語からキルギス語へと転換する試みが見られるが、政治的・経済的要因から、社会的にロシア語を重視しなければならない現状にあり、キルギス語中心の言語政策を決定する際に大きなジレンマがあること。
- ②個人においても、アイデンティティ形成の観点から、どの言語を使用していくかに関して心理的な葛藤があること。

### 3. 修士課程1年次における成果と課題

卒業論文の結果を踏まえ、修士課程入学後は、キルギス共和国における言語政策について、主に法律と行政に関わるキルギス語及びロシア語の一次資料を幅広く収集し、精読する作業を通じて、厳密な分析・考察を目指してきた。その結果、以下の2点が明らかになった。

- ①キルギス語中心の言語政策の実施に関しては、国民に大きなジレンマがあるものの、言語法、行政文書の内容および変遷等を詳細に分析した結果、少なくとも制度上では、着実にロシア語からキルギス語への転換が進行していること。

②2008年9月～10月に実施した予備調査（観察・聞き取り）の結果、特に都市部の社会生活において、キルギス語が用いられる場面が明らかに増加していること。

#### 4. 今後の研究計画

これまでの研究成果を踏まえ、修士論文及びそれ以降においては、以下の2点を研究目的として設定したいと考えている。

- ①ソ連崩壊後のキルギス共和国における国家語の動態を総合的に検討すること。
- ②特に、これまで不可視であったロシア語からキルギス語への転換の実態を多角的な視点から明らかにし、そのメカニズムを解明すること。

修士論文の段階では、分析対象を行政分野と法律に絞る予定であるが、それ以降では教育、日常生活等様々な観点からキルギス語化の実態を検討したいと考えている。

#### 質疑応答

まず、指定討論者のお二方からは、民族問題と絡めた質問、対象とする地域（首都か地方か）に関する質問や、キルギス語習得を義務付ける法律が適応される範囲及び民族による区別の有無などの点について質問をいただいた。

他のプログラム生からは、問題設定の仕方や理論的枠組みに関するコメント、中央アジアの他の国との相違点・共通点に関する質問等をいただいた。

また、指導教員の白山先生、アドバイザー教員の人間総合科学研究科の岡本先生にも参加していただき、それぞれが所属する研究領域の立場からの確かなコメントをいただいた。

指定討論者を含め、プログラム生の方々、先生方から建設的な質問・コメントをいただき、非常に有意義な経験となった。しかし、今回は私の研究内容・成果について大まかに発表し、特にこれまで収集したデータ等を提示することもなかったもので、かなり議論のしにくい内容だったのでとは反省している。